



令和8年2月17日 本校

チームたかたく・はくれい

「なかよく学び すすんで働こう」「希望・意欲・自立」

子どもの育成を目指して -本校 校長たより②-

～自分のできることで、まわりの人を笑顔にしよう!幸せにしよう!～



上松 武

■「ありがとう」と伝えたい時期ですね ～2/12 高等部・卒業生を送る会～



・2月12日(木)に高等部の卒業生を送る会が行われました。1年生と2年生からは、普段の授業で3年生と一緒に歌ったり踊ったりした歌やダンスの発表があり、先輩への感謝のメッセージが毎日の何気ない学校生活のひとコマとともに伝えられました。3年生からも、ともに切磋琢磨して学んできたことへの感謝と、この学校のリーダーとして「後は頼んだ!」という力強いエールがありました。たくさんの「ありがとう」が伝えられた心温まる会でした。

- ・みなさんは、小林正観さんを知っていますか。もう逝去されましたが、人間の潜在能力や超常現象に興味を持たれ、心学などを研究されていた方です。著書に『ありがとうの神様 (ダイヤモンド社)』や『楽しい人生を生きる宇宙法則 (講談社)』などがあります。
- ・「ありがとう」を伝えるとどんな効果があるのだろうかと以前から興味関心があり、『ありがとうの魔法 (ダイヤモンド社)』を読んだことがありました。その著書の最後に、次のようなことが書かれていました。

●「ありがとう」と感謝をして「喜ばれる存在になる」こと

人はひとりで生きていくと「ヒト」ですが、喜ばれるように生きていくと、人と人との「間」で生きる「人間」に変わります。人の「間」で生きるということは、「自分が必要とされている」ということです。

「人間」の生きる目的は、ほしいものを得たり、何かを成し遂げるのではなく、

- ・「人の間で喜ばれる存在になること」
- ・『「ありがとう」と言われる存在になること」

にはかなりません。発する言葉や表情など、その人の振る舞いが「まわりを喜ばせるもの」になっていけば、投げかけた結果として、まわりの人があなたにとっての「よき仲間」になってくれるでしょう。

「しあわせ」の語源は「為合わせ」です。お互いにしてあげることが、「幸せ」の本質なのです。

努力をして、頑張っ、必死になって、自分の力だけを頼りに生きていこうとする人のもとには、人は集まりません。「孤独という状態」が続いてしまいます。

一方で、「自分の力なんてないんだ」と思っている人は、まわりに支えられて生きていることがわかっているので、「謙虚」です。

「謙虚」とは「感謝」すること。「感謝する人(「ありがとう」を言う人)のもとにはたくさんの人が集まってきて、「よき仲間」に囲まれます。(P351-P352 引用)

- ・「ありがとう」には感謝を伝える力があるほかに、自分自身が謙虚な気持ちになり、よき仲

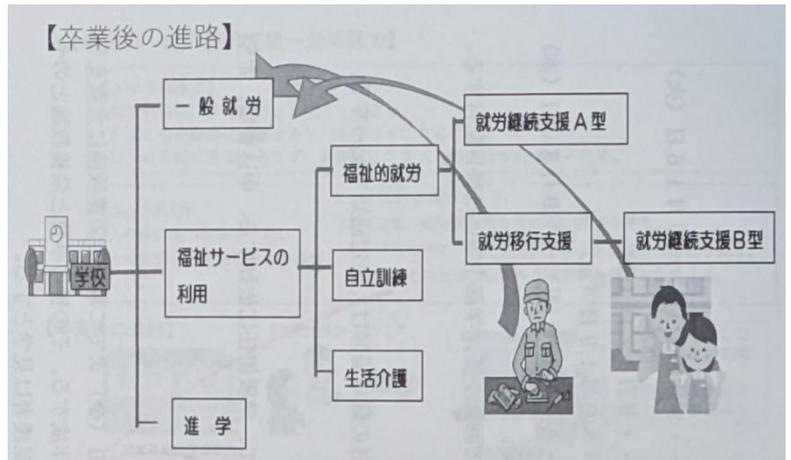
間に囲まれる力があるようです。

- ・小中学部でも卒業生を送る会が計画されていますし、学級においても感謝を伝える喫茶店や劇で感謝を伝える会などを行うようです。卒業生や招待された人は嬉しい気持ちや感謝の気持ちを抱くことでしょう。その一方で、企画実施する側も結果として喜ばれる存在となり、感謝されることとなります。
- ・このような経験を重ねることで、誰かの役に立っていることを実感できます。「世のため、人のため」の気持ちをこれからも育てていきましょう。

## ■小学部のうちから、一人一人の進路実現のために

～上越ブロックマネージャー矢島先生の資料から～

- ・高等部3年生はあと1か月半で卒業します。卒業後の進路先は、就労継続支援A型や就労移行支援、生活介護などいわゆる福祉サービスの利用が12名、企業等への一般就労が4名となっています（左図を参照）。



- ・16名の3年生は、今と将来の生活を送るための基礎的な学習と、継続的に取り組んできた作業学習、そして年間2回の校内実習や現場実習などに、3年という時間をフルに活用した地道な積み重ねによって、一人一人進路実現を成し遂げました。
- ・以前のたよりも書きましたが、中学部や小学部の先生方からは、高等部の生徒が作業学習に取り組んでいる姿や、毎日5限にある「生活」という授業で何を学んでいるのか見てほしい（他にも「家庭生活」や「社会生活」「ふれあい」という授業もあります）。
- ・高等部の生徒の姿や学習内容から、今関わっている児童生徒にとって、「今どんな力が必要なのか」「中学部へ進学するには何を身に付けなければいけないのか」など、先を見越して身に付けたい力を考えたり、18歳になって地域で生活している姿が想像できます。授業として実践する参考になるので、ぜひ見てほしいと考えています。
- ・でも、すでにこのことに取り組んでいる児童生徒の姿がありました。
  - －小学部6年生は中学部の授業体験をした後、再生封筒づくりに挑戦
  - －中学部では、高等部の作業学習を見学したり体験したりした後、学校生活での挨拶や作業学習での報告に力を入れた指導を実施
  - －小学部の低学年においても、昼休みに中学部や高等部の教室まで散歩に行き、お姉さん、お兄さんの姿を拝見
- ・本校は小学部から高等部までの12年間を見通して指導支援ができる利点があります。学校教育を終了した時の姿を見て、今と将来に必要な学びを考えることができます。担当する児童生徒と関わる時間は一年かもしれませんが、その一年間で一年後の姿はもちろん、三年先、五年先の姿も見越して、教育活動を展開できる環境にあります。
- ・“児童生徒の学びのための学部間連携”、今から意識的に実践していきませんか。

## ■「見る」と「観る」の違い

- ・「複数の眼で子ども一人一人をみましょう」とよく言います。この場合の「みる」は「見る」でしょうか？ それとも「観る」でしょうか？
- ・AIに質問したところ、『見る』と『観る』の主な違いは、意識の強さと目的です。『見る』は受動的に視界に入る広い意味（日常的、なんとなく）であるのに対し、『観る』は能動的に意識して、じっくりと鑑賞・観察するという意味合いで使い分けられます。」という回答でした。
- ・年度末、いつもと違う学習活動が行われます。その状況を受け止めにくい児童生徒は、その場に則わない行動を取りがちになります。だからこそ、複数の眼で子ども一人一人をよりよく観てください。
- ・このようなことが容易に想定できる環境で、必要な支援を講じられず、子どもたちに不利益が被る事態が起こったとすれば、私たち指導者側が大いに反省し意識を改めなければなりません。
- ・決して、受動的になんとか視界に入っているという「見る」ではなく、「いつもと違う時程だから」とか、「いつもと違う学習だから」という一段高い意識で「観る」ようお願いします。

## ■TEAM EFFORT(チーム全員の努力) ～大リーグ・ドジャースが連覇できた理由～

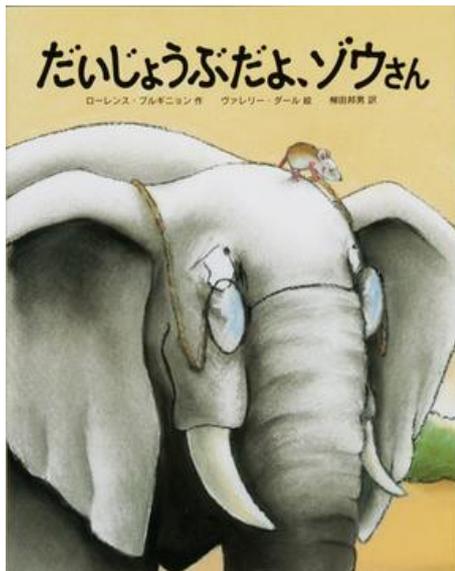
- ・昨年のことになりますが、大リーグ・ドジャースの大谷翔平選手がリーグ優勝決定シリーズのMVPを受賞した後、「TEAM EFFORT(チーム全員の努力)」というプレートをトロフィーに付けてクラブハウスに設置したという出来事がありました。大谷選手自身の活躍以上に「チーム全体で勝ち取ったもの」「全員が良い仕事できて勝ち取ったもの」といった強い謙虚さと結束を高めるメッセージが当時話題となりました。この結束力で(!)ワールドシリーズ連覇を果たしました。
- ・私はこの「TEAM EFFORT(チーム全員の努力)」という考え方を大切にしていきたいと思っています。今以上に努力しようと言いたいものではありません。今置かれている立場で、児童生徒たちに何ができるのか考えて行動するように努力しよう。一緒に働く先生方のために何ができるのか考えて行動するように努力しよう。このようなことを大切にしたいと考えています。そして、本校に勤務する私たち職員一人一人が授業改善を進め、指導支援を実践していったら、今以上に結束したやりがいを感じられる学校組織になっていくと思っています。
- ・令和7年度の締めくくりと令和8年度のスタートダッシュに向けて、今から「TEAM EFFORT(チーム全員の努力)」を意識して、学校運営を全員でやっていきましょう。よろしくお願いいたします。 ※右上の写真は、「ショウタイムズ」ホームページから引用しました。



## ■書籍の紹介

『だいたいぶだよ、ゾウさん』ローレンス・ブルギニョン 作 ヴァレリー・ダール

柳田邦男 訳 文溪堂



### 内容紹介

年老いたゾウは自分の死期を悟るが、一緒に暮らしていたネズミはそれを受け入れられない。しかし幾つもの季節を重ねるうちにネズミも成長して…。

相像してみてください。だいな愛するひとがあの世界にいつまでもまことを。だれでも、すぐには受け入れられないでしょう。しかし、月日が過ぎていくなかで、ひとはいつしか、つらく悲しい別れでも、それを受け入れられるように心が成長するのです。幼いネズミくんは年老いたゾウさんに、「いっちゃんやだ」といいます。しかし、弱ってきたゾウさんを一生懸命ケアするうちに、心が成長して、ゾウさんがゾウの国に渡るつり橋を修理してあげます。そして、「こわがらないで」と

いって見送るのです。ゾウさんは「だいたいぶ」といって、渡っていきました。

この物語は、著者が幼いころから死について話してくれた祖母との別れの体験をもとに書いたそうです。いまの時代、家族の病気や死について、子どもは会話の輪のなかに入れてもらえないため、一生のなかでとてもだいな死について学び、心を成長させる機会を失っています。この絵本は大人にも子どもにもだいなことを語りかけているかと思います。柳田邦男（本書帯文より）

絵本ナビホームページ引用

『バスが来ましたよ』由美村 嬉々 文 松本 春野 絵 アリス館



### 内容紹介

「バスが来ましたよ」

この一言が、病気で全盲となった山崎さんの通勤を10年以上支えました。声をかけたのは山崎さんと同じバスで小学校に通う、さきちゃん。さきちゃんが卒業してもその声掛けはさきちゃんの妹や他の子へと引き継がれ、続いていきました。

もしかすると、「その話知ってるかも」と思われた方もいるかもしれませんが。それもそのはず、これは実際にあった出来事で、テレビやラジオで話題にもなりました。この話をオンラインニュースで知った作者の由美村嬉々さんは「ぜひ絵本にしたい」と思い立ち、絵を担当した松本春野さんと一緒に、山崎さんの住む和歌山へ何度も赴いて取材を重ねたのです。

穏やかなタッチで描かれた子どもたちは、みんなやさしい笑顔をしています。ひょっとしたら山崎さんも、こんな風に心の中で子どもたちの姿を思い描いていたのかしらと想像すると、その心にそっと触れるような感覚になります。

実は、さきちゃんをはじめとする小学校の子どもたちは、自発的に山崎さんへの声かけを引き継いで、続けていたそうです。また、さきちゃんが通っていた学校と山崎さんが交流する中で、さきちゃんよりも先に山崎さんを支えてくれた児童がいたことや、いつも助けてくれる子がお休みのときは、別の子が助けてくれていたこともわかったそう。

思いやりのバトンを渡し続けてきた子どもたちの優しさ、そしてその親切に支えられた山崎さんの幸せな気持ちを、ぜひ絵本でかみしめてください。

絵本ナビホームページ引用